

むかし。

ある秋の日暮れがたのこと。ひとりの旅人が野原で道に迷いました。向こうのほうに明かりが見えたので、行ってみると大きな屋敷がありました。旅人は、

「すみませんが、ひと晩泊めていただけませんか」と、声をかけました。すると、若い女が出て来て、

「どうぞ泊まって行ってください」といつてくれました。そこは広い家で、蔵が四つもありましたが、女のほかに、家の者はだれもいませんでした。

女は、旅人を座敷に通して、ごちそうでもてなしてくれました。そして、しばらくすると、

「わたしは、これからちよつと使いに行ってきますから、留守番をしていてくれますか」といいました。そして、

「前庭にたっている蔵のうち、左から三つまでは見てもいいですが、四つめの蔵だけは、けつして見てはいけませんよ」と、念をおして出かけて行きました。

旅人は、ひとりになると、やがて退屈になつてきました。そこで、左の端の蔵の戸を開けてのぞいてみました。すると、蔵の中は、海辺の夏の景色でした。つぎの蔵を開けると、色づいた山の秋の景色。三つめは、寒い田舎の冬の景色でした。

旅人は、最後の蔵も見なくなりました。けつして見てはいけないといわれたけれど、とうとう四つめの蔵も開けてしまいました。

そこには、一本の梅の木があつて、そのえだに、うぐいすが一羽とまつて、「ほーほけきよう」と鳴いていました。うぐいすは、おどろいて鳴くのをやめて、飛んで行ってしまいました。旅人も続いて外に出ました。すると、そこに、主の女が立っていて、悲しげにいました。

「あなたは、なぜこの蔵の戸を開けたのですか。正体を見られたからはしかたがありません。わたしは、この蔵で鳴いていたうぐいすです」

女は、うぐいすになつて、どこへともなく飛び去りました。それと同時に、屋敷も蔵もみな消えて、旅人は、ひとりもとの野原の草の上に立っていました。

おしまい

村上郁再話

資料『岩城昔話集』岩崎敏夫／三省堂